

闇（リース作）：文苑

著者	かずを
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 8
ページ	3 5 - 4 5
発行年	1903-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2298/5520

闇 (カミナリ)

か　　ず　　を

Viel Sterne stehn am Himmelzelt;
 Es giebt nur einen Wariengir-Baum!
 Viel Menschen giebt es auf der Welt,
 Doch einen nur erseht mein Traum.

一

日は傾きぬ。

見渡すかなた、珊瑚礁のあたり、一つら低き棕櫚の木かげ、やうに黒すみ、只はの白う、立迷ひたる沙
 けひりさへ、夕の色を引きさるゝれば、闇の影まづ動きて、きはみなき海原の彼方より、靜かに、聲なく。
 海に臨める、蒼鬱たる林中、美しき翼しげたゝとて、枝より枝に飛びかひ、さびしき歌に、つれづれあ
 びわたる鸚鵡の、時をもとめて去りしよりは、さすがに熱帯なれば、大蛇ひろむ草叢より、逞しき枝を
 組み交せる木立の、梢より、幹より、緑いろ濃き葉末より、蒸すが如き熱氣、むらむらと立ちのぼりぬ。
 やがて、ちやひふ樹のみづね、幽かにうよぎ、夕風うよるよと渡れば、物みなよみかへりて、す
 しき竹の葉、一齊になびき、棕櫚のひろ葉、さらさらと揺れぬ。せうらぐ小川のあたり、咲き亂れ
 たるせるぐの花、一しきりこぼれ、水の面には、点々として、紅あざやかなり。

葉末の叩きと名残をとめて、風は、何處ともなく吹き去れば、床しき花、一しほ薫じて、林は今、
 ひしひしと襲ひ来る夜陰につつまれぬ。

とする間もなく、火光一点、林中に閃き、數條の光線は、寂たる闇の裳裾を縫うて流れぬ。

やがて、彼方の山かけの小徑より、此方の磯のうしろより、小ぐらき森より、低き家より、黒きもの動きをめたるが、皆林をさして急げり。

一点の火光は、焼け上りて、忽ち、一團のかどり火となり、風のまにまに、あやめもわかぬ闇をかき亂しては、おちこちに、その鮮やかなる光を投げつ。闇の手に委せられたる程もあらず、林は今、復活の偉觀を呈せるなりき。

たどは、滴らんばかりに墨汁含ませて、み空に、にじり書せるにも似たる、あたりの木立は、さながら血に渴ける如く、しげれる枝をさし伸べ、争ひて紅の色を貪りぬ。咽ぶがごとき聲をたて、闇を流るゝいさゝ小川も、また漣をあげて、紅の光を吸ひぬ。

二

そのかみの血祭に、犠牲をささげし魔壇の跡か、苔むせる巨巖を繞りて、百余人。集ひ來れる、土人は、篝火に、抜き放てる刃を照らしみては、かろくはゝわむ。

人はもの言ふこと少なし。小川のせせらぎ。かすかなる波の音。棕櫚のそよぎ。あたりの静寂を破るは、たゞこれのみ。

やがて、彼方のしげみより、骨ぐみ逞しきが、つとあらはれ、靜かに、巨巖の方へ歩みよりつ。眉のあたりに、言ひしれぬ思ひを湛え、腕拱ぬけるまゝ、

今宵なるぞ。かの白人の館を襲ふは今宵なり。わが命に應じて、こゝに集へる、同じ心のほらからこゝろ、げにわが鳥を愛する人々なれ。かの惡むべき新島司より、苦しめられ、惱まされ、

辱しめられ、海の幸、山のさち、豊かなるこの嶋の寶を、ろがとるにまかすは、我等の堪ゆるどころ——

わが父は基督教徒なりき。わが祖父もさなりき。されど、白人の辱しめを蒙りしことなかりき。我もまた基督教の信者なり。ざるを、惡むべきはかの島司なるかな。われを目して、回教の犬となせるは、あゝ、かの島司にあらすや——

我に劍あり。わが腕に血あり。如かず、研ぎすましたる劍さかど立て、たゞ一思ひに、ろが胸を貫かむには——

かゞり火は、一きは明るく、首長を照らせり。憤の色は、面わに燃えて、目は怪しきまで輝きぬ。湧きかへりし黒雲は、恐懼を提げ、重々しげに、み空より舞ひ下りて、今林をつゝまむとす。かなたには、暗緑の色を湛えて、海は、靜かに、ふかき眠に落ち、もの凄きばかり。大氣には少しの波動だになれば、木立は戦かす。

はらからよ。神のみ心にかなひてぞ、幸は、とこしへに盡きざらむ。事ならざれば、すなはち死。即滅亡。これ我等が心。

あはれ、うれしき門出に、わが救世主のみ名をたゞへて、禱をあげなむ。

濁りを帶べる首長の聲は、更に凄寥の度を高めぬ。

かく言ひて、首長は、髯白き牧師をかり見ぬ。人々、帽を脱して跪けば、牧師は、れごろかなる口調に禱りをなしぬ。

げに、死よりも靜かなる夜あるかな。

祈禱まさに終らんとせる時、俄かに、かすかなる轟、遙かの彼方に聞えたるが、やがて、高く高くなり、大地は、徐ろに揺れろめたり。雲は飛ぶこと頻りに、波は躍りぬ。

地震なり。一聲高く、牧師は倒れぬ。

本立さわぎて、枝折れて、幹は片々に碎けぬ。

珊瑚礁のあなたに、白馬の狂へるが如く、荒れにある、大波小波は、磯にあたりて颯と碎け、夜目にも白う、雪のごとき花を散らせり。恐ろしき響を齎して打寄する波に、あらゆるものは、ゆるぎつ、震ひつ。

日頃はしらず。時も時なり。人々は不安と恐怖とに捉へられぬ。

あはれ、こは、不祥なる前徴にあらざるか。

幽かなる聲に、顫ぐものあり。

三

恐ろしき地震は、やがて止みぬ。

林中、再び篝火かすかなり。逃げうせたる黑影は、やがて歸り來れども、不安の念に驅られたる人々の、だゞ飛び散る火花を眺めやるのみ。無言はつきぬ。

不祥なる地震の、いかばかり、一隊の士氣を喪はむかと、皺ふかき臉を閉ぢむたる牧師は、靜かに立上りて、口を開きぬ。

友よ。同胞よ。憂ふことをやめよ。白人の影を絶てよとは、神のみ言葉なり。口づちか聞えさせ給ひし宣なり。

夜ぞと、怪しき精のさまよふあり。たけなる髪を波うたせつゝ、家をめぐりて、我が心を騒がせたるも幾度。

ある夜のことなりき。まんが樹の梢、ゆれにゆれて、騒がしきまで屋根をうちぬ。我は夢より目さめ、驚きて戸外にかけ出でたるに、あたりは静かにして、物のけはひなく、地上には、散りこばれたる、香はしき花五つ六つ。あやしき精はいづこ。見上げたる中空には、清く、尊き、基督のみ姿をばらぬなり。我は、たぐぬかづきぬ。

つぎの夜半、わが名をよぶ者あるに驚き、静かに耳を澄せば、神のみ聲あり。一言。なれ等の島より、異人種を追へよと。

あゝ、これ神のみ心なり。憂ふるなかれ。神のみ心にかなひて、嶋司の館を襲はなむ。不思議なる物語は、いたく人々の心を撲ちぬ。

かゞり火燃ゆ上りて、花やかなるに、さながら神靈をさづかりたらむ如く、人々は腕をさすりつ。首長の命に、やをら立上らむとせる時、彼方の木かげに、人のけはひあり。人々は、驚きて見つむれば、葉越に乙女の姿あらはれぬ。

房々とせる髪、露のことき腫、花のことき唇――

首長の君。妾に願あり。聽入れ給はずや。

今宵、かの嶋司の館を襲ひ給ふとか。今、村人より告げらるゝまゝ、妾も……また同じ心の、直ちに、剣とりて馳せ來れり。力弱くとも、勇ましき一隊に加はることを許してよ。

首長の前に跪づきたる乙女は、頭をあげぬ。黄金の耳輪ちらりとして、兩の肩にこばれたる髪は、さ

と一つになり、うしろに渡うちぬ。聴しき眼に、首長を見あげたるが、やがて、またうなだれつ。
首長は、人々をかへりみ、やゝ頭かたむけたるが、さて、

われは、けなげにも、戦ひの庭に、いで給はむとの、御身の心をよるこふ。

されど、クリスチナよ。か弱き、脆き、柔らかなる絹につゝまるゝ乙女の身にて、雄々しき男の、血と、鐵との業をなさむには、容易にあらざるべし。家に歸りて、靜かに待ち給へ。御身に代りて、かの異人種の影を絶つべければ。

人々は、うつくしき乙女を見やりぬ。

かなはずとや。妾の切なる願は、聽入れ給ひ難きか。

目に涙を湛めて、首長にとりすがりしもかなはず。心ひそかに、不祥なる地震を、ねもひ合せたる首長は、たゞ家に歸れとのみにて、耳傾けざるに、さらばとて、乙女は去りぬ。彼方のしげみに、ふたたび、その姿はかきけすが如く。

四

怪しき一隊は動きいでぬ。

鳥も飛びず、魚も躍らず。萬象あまねく寂たる裡を、たゞ、闇に亂るゝ明光々。劍の光しきりに閃めき、林を出で、小川に沿ひ流れ流れて、ゆくこと里余。

奇しき輪廓を、み空に刻める、かなたの山の麓、白堊のはの見ゆるが、かの島司の館なり。一隊はるの前に至りて停まりぬ。

闇中に聲あり。

眠りつゝある間に襲はむ。

さなりと、百余の黑影は、水色凄き濠を越え、構へいかめしき廊壁を攀ち、音をも立てず、ひらりと、庭内に躍りこみつ。

窓越に、どもし火淡く、あたりは静かなり。

はや、わがものなり。いで討入らむ。

一つの聲は命じぬ。俄かに、闇にひしめく聲。劍の音。

内を窺ふ人のけはひありと、守衛は驚きて劍をとり、戸を排して階段にたり立ちたるが、幾重の闇をすかし見たるも早し。白光ちらりと流れて、首は地上に飛びぬ。

そが最後の悲鳴は、あはれ、慘劇の序幕となりぬ。

戸外の黑影は、一齊に闇をつくりぬ。ながき沈黙に堪えかねたる天と、地と、なかき喜ばざるべき。ろを迎へて、恐ろしさまで、反響せしめぬ。

つゝきて又一人。更にまた一人、つと首を出しぬ。血げむり颯とたちて、頭なき屍は、手をあげて虚空を掴めるもしばし、階段の上より、倒まに闇中に落ちぬ、

血の香は、再びあたりを満たり。

劈頭の犠牲に力を得て、いづれも、祝しつゝ、喜びつゝ開かれたる扉より、黑影は、屋内に流れこみぬ。

惡むべき島司はいづこ。我等は血に渴あり。

一隊は、はや、夜の暗き廊下に。

再び新らしき血烟やたちし。崩るゝばかりよばひて、黑影は、彼方に走せちがひ、此方に行き交ふ。島司は目さめたれど。番卒をよぶに暇あらず。枕べにかけたる劔を提げたるまゝ、室外に躍りいでつ。

血の香、一きは鼻を衝くに、己が妻子の上など思ひ出され、目くらみ、心なやみ、たどはゞ、夢中に痲痺せる心地。

突然。うしろに聲あり。

島司にあらずや。あゝ、わが敵、わが仇。今はのがさじ。

見かへれば、かの首長なり。たぢろく足を、辛うじて支は、顫ぐ手に、刃をふりかざせしも——あゝ——悲鳴をあげて、島司はかなしき命運の前に仆れぬ。血しは迸しりて、床には紅の色を流せり。

館の内となく、外となく、黑影は、白人を求めて、荒れに狂ふ。

島司には一人の子あり。白人ならずや。若きたの子ど。いづこにか潜める。來れ人々。白人の血を見ずや。

導く聲は彼方に走りぬ。つづきて、幾條の劍光は、ろが後を追ひ、闇を流れて去りぬ。

あはれ、かの君を求むるに非ずや。か弱き乙女の身もて、げに恐ろしき人々の一隊に加はらんとせしも、ひとへに、かの君を思ひ、かの君を助けなむとの心よりなりき。禍は今、かの君の上にかゝれり。

何處よりかあらはれけむ。かの林中の乙女は、思ひもろざる。髪ふり亂しつゝ、ねそるゝことなく

人々の後を追へるが、姿は、やがて、闇に消ぬ。

あはれ、かの若き白人はいかにせし。あはれ、かの乙女は、いかにかなりし。

かすかなる呻吟。半ばにして絶ゆる悲鳴。叫喚あり。苦悶あり——

荒れ狂ひし敵も、やがて何處ともなく、影を潜めて去れば、闇けゆく夜陰に、血の香一きは、腥さのみ。

眼を怒らし、鋭き爪をどぎて、闇黒なる天の一方より、墜下し來れる「滅亡」は、今や、靜かに、ろの黒き、おもき、翼をたぐみつ。

渴きたる天地も、すでに、すでに、血に飽きしか。空には黒き雲あり。地にはふかき闇あり。

夜は、ふたたび、狂暴なる彼等の叫びを聞かず。

五

物凄きばかりなる夜半を、たゞ一人、島司の館をさまよへる乙女あり。

腥き血の香を送りて、冷やかに吹く風に、持ちたる灯火の光、たかく、低く搖ぎ、かなたの戸のかけに消ぬ、此方の階段のあたりに、かすかなり。

怨をのみて、逝きにし人の魂とや見ゆ。

窓の下、廊下の隅、あはれなる人々の屍横はりて、床ににじめる血汐も、未だ乾きもやらず。冷かに、物忌ましく、そが同胞の、兇惡なる行の跡を今更に、乙女は驚ど、怖どに撲たれぬ。

二歩三步、行きてはどまり、どまりては行き、火影は、暗憺たる闇を、たねたねに縫ひゆく。足音。嘆聲。けに聞かるゝばかりなり。氣弱き乙女は、顫く足を、辛うじて運びつゝ。

顔の色蒼ざり、血に染れる唇黒く、雙の手を胸に組み、仰向けに臥したる、若き白人あり。

二 かの君にあらずや。

戦慄は乙女の全身を傳ひて流れぬ。血の働は止りぬ。乙女は言はむとして言ふ能はず。叫ばむとして叫ぶ能はず。暫しは氣も絶え入るばかり、冷やなる人の胸に打伏したるが、やがて、身を震はして、狂へるが如く、

ゆるし給へ。御身も遂に、わが同胞の刃にかゝり給ひしか。

恐懼は、更に、鞭のごとく烈しく乙女をうちぬ。

少時

乙女の聲やかよひし。死したるごとき人は、僅かに頭を動かしたるが、靜かに、眼をみ開きぬ。みつめたるまゝ、視線は、絶えず乙女の顔を追ふ。

冷けき一道の風、さつと吹き入りぬ。ゆらめける灯火の光、力なくとも、かすかに、かすかに、よみかへれるかの君の面わの、なごか、見はわかざるべき。さながら、水を浴びたる如く、身動もせで見まもりぬたる乙女の頬には、今よろこびの光かがやきぬ。

クリスチナにあらずや。

あゝこれ、戀ひ慕ひたる、かの君の聲にあらずや。

椰子二三、くらき影を落せる磯のあたりより、一葉の舟、搖々として漂ひいでぬ。

日盛りには、目にも入らざりし遠山の。頂より吐き出す炎の、北に南にうち靡きて、ほのかに照ら

せる波の上、舟は音なく走れり。

たけなる髪を風にまかせ、か細き腕さしのべて、乙女はたゆまず休まず、櫂をあやつる。冷やかなる死の手より、いとしき人を救ひて、今、何處にか向ふ。

風は静かに、波はだやかなり。かぐろき陸は、はや、遠くどほく。

櫂のさきより、露滴ることしきりに、燐光となりて波にきらめけば、長く引ける波足、また、青き光を放ちて、舟の後を追ふ。

見上ぐる彼方、神秘なるみ空寂として、夢の如き十字の星は、はや、めぐりにめぐりぬ。

(三月二十四日稿)

